



Title	明和改正謡本の成立とその背景
Author(s)	中尾, 薫
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/49089">https://doi.org/10.18910/49089</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	中尾 薫 <small>なか おる</small>
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 21702 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	明和改正謡本の成立とその背景
論文審査委員	(主査) 教授 天野 文雄 (副査) 教授 永田 靖 教授 荒木 浩

#### 論文内容の要旨

本論文は安永 3 年(1774)に 53 歳で没した第 15 世観世大夫の元章が幕府御用書肆で歌書などを刊行していた出雲寺和泉掾から明和 2 年(1765)に、それまでの観世流謡本を全面的に改訂して刊行された明和改正謡本をめぐって、その改訂の実態、そうした謡本が生まれる背景、さらには明和二年の刊行にいたるまでの改訂作業の経緯について論じた論文で、分量は 400 字詰原稿用紙に換算して 600 枚ほどである。また、付録として資料編(53 頁)と元章関連年表(9 頁)を付している。

第 1 章「明和改正謡本の改訂詞章をめぐって」は、第 1 節「明和改正謡本の改訂基準—元和卯月本との比較を中心に—」、第 2 節「明和本の神話世界—『古事記』研究の投影を中心に—」、第 3 節「明和本における『源氏物語』享受—《住吉詣》の改訂をめぐって—」、第 4 節「新作能《梅》における宗武説の投影—真淵とのうめ論争をめぐって—」の 4 節で構成され、元章による改正の実態や改正のねらいが、《淡路》《賀茂》《代主》《住吉詣》について検証されている。とりわけ、《淡路》《賀茂》《代主》については、田安宗武の著『古事記詳説』の所説との一致が指摘され、元章の新作になる《梅》については、梅をめぐる田安宗武と賀茂真淵との論争をふまえて、同曲における宗武の学説の顕著なることが指摘されている。

第 2 章「明和改正謡本成立の背景」は、第 1 節「江戸期の随筆に描かれた〈明和の改正〉—田安宗武と観世元章の交流をめぐって—」、第 2 節「田安家における謡本改訂の片鱗—田安家旧蔵『版本番外謡本』の書込みをめぐって—」、第 3 節「田安宗武の能楽愛好—田藩文庫の能楽関係資料を手がかりとして—」、第 4 節「甲州における能楽事情—宗武卿の甲府城能舞台拝領と元章の手紙を軸として—」の 4 節で構成され、近世の随筆や田安家旧蔵の版本番外謡本、田藩文庫の能楽関係資料などをもとに、明和改正謡本成立の背景を多角的に論じている。

第 3 章「明和改正謡本の改訂経緯」は、第 1 節「明和本《冊子洗》をめぐる諸問題—詞章・演出・改訂者—」、第 2 節「加藤枝直と明和改正謡本—謡曲改正草案幀の再検討から—」、第 3 節「永正三年本《玄上》と明和改正謡本—加藤枝直説の投影を中心に—」、第 4 節「明和改正謡本の改訂経緯と参画者—成立過程の仮説と賀茂真淵の関与をめぐって—」の 4 節で構成され、真淵の門人であった加藤枝直の関与をめぐって、明和改正謡本における数次の改訂について論じている。

## 論文審査の結果の要旨

観世大夫元章による明和改正謡本の刊行は能楽研究史上に著名なできごとであるが、それが江戸時代という能楽の長い歴史の比較的後代のできごとであったこともあって、さほど多くの研究の蓄積がなされているわけではなく、能楽史における意義という点では、能楽の固定期における観世流という、一流儀における一時的で特異なできごとという受けとめられかたが一般的であった。しかし、明和改正謡本に集約されている観世大夫元章の能楽改革にたいする壮大な意図と強い意志は、能を一つの劇として把握しようとした点において、700年という長い歴史を有する能楽の歴史のなかでもとりわけ特筆に値するできごとであった。そのような意義を有する明和改正謡本について、主として、御三卿のひとつである田安家初代当主宗武と明和改正謡本との関係を軸に、改訂参画者がだれであったかという問題と、彼らが実際にどのような役割をはたしたのかという、明和改正謡本の背景となる問題を多角的に論じたのが本論文であるが、そのような本論文の第一の功績は、従来、明和改正謡本への関与があまり強くないとされていた田安宗武が、じつは改正の主導的な立場にあったことを、説得的に論証した点にある。

そのことは、本論文においては、まず第1章において、《淡路》《賀茂》《代主》それに元章作の《梅》における宗武の古典研究における所説の影響が明快に指摘され、さらに、第2章において、田安家旧蔵の版本番外謡本の書き込みをもとに、明和改正謡本の改訂経過、あるいは田安家における改訂作業の実態が具体的に指摘されたことで、まず確実と思われるが、第2章の第1節「江戸期の随筆に描かれた〈明和の改正〉」では、既知の『翁草』『貶観録』『仙台閑話』に加えて、あらたに『譚海』『甲子夜話』『難波江』などの明和改正謡本に関する記述を紹介し、それによっても田安宗武の明和本改正謡本刊行への関与が補強されている。明和改正謡本の刊行と田安宗武の関係についての従来の理解は、宗武はたんなる名目上の存在で、改訂事業の中心は観世大夫元章であるというものであったが、この点では本論文によって根本的な見直しが必要になったわけで、この点では本論文のもっとも大きな価値として高く評価することができる。なお付言すれば、上述の観世流詞章の改訂の状況を如実につたえる明和本の田安家旧蔵番外謡本の紹介は、本論文中の白眉と称するにたる意義を有している。

この他、本論文では、国会図書館蔵の『謡曲改正草案幀』の子細な検討から、数次にわたる複雑な詞章改訂の経緯を推定したことも、明和改正謡本の研究にとっては大きな前進といってよいことであろう。また、それに並行して、加藤枝直の改訂への関与についても、それが従来想定されていたよりはるかに深いものであったことが明らかになったことも、逸することのできない業績である。また、本論文では、元章の詞章改訂の背後にあった田安宗武、加藤枝直、賀茂真淵などの古典研究をも視野に入れられているが、この点も本論文を奥行きのあるものにしてはいるが、一方、改訂にかかわった上記の人々のはたした役割についての認定など今後に残された問題も少なくはない。また、記述にやや慎重さを欠く点も、内容がすぐれているだけに惜しまれる現象ではある。

以上を総合するに、本論文は、長らくやや固定観念にとらわれて停滞気味だった明和改正謡本の研究を大きく進展させた業績として、学位（文学）を授与するにふさわしい研究と認められる。